藤森神社（重要文化財・市指定有形文化財）は，平安期以前，神功皇后が軍旗や武具をこの地に埋め神まつりしたのが始まりと伝えられ，菖蒲の節句発祥の神社としても知られている。５月の藤森祭では，朝から神輿３基が氏子内を巡行し，武者行列が練る。端午の節句に武者人形を飾る風習はこの行事に由来する。この日，境内では駈馬（かけうま）神事（市登録無形民俗文化財）があり，馬上妙技が披露される。

東福寺は，臨済宗東福寺派の本山である。三門（国宝）をはじめ，浴室，東司（とうす）禅堂（選仏場（せつぶつじょう）），鐘楼（いずれも重要文化財）など貴重な建築が残る。龍吟庵（りょうぎんあん）方丈（国宝）は現存最古の方丈建築であり，方丈の周囲に枯山水の庭園をめぐらせる。境内の通天橋は，紅葉の名所であり，寛政１１年に発行された「都林泉名勝図会」にもその様子が描かれている。

伏見街道には他にも，泉涌寺や石峰寺などの寺社や名所があり，街道はそれらの名所を繋ぐ形となっている。それぞれの寺社において様々な祭礼などが行われており，その街道沿い付近では，みやげ物の販売などの営みが行われており，街道沿いの寺社などの歴史的建造物や町並みと一体となって，歴史的な街道筋の風情を形成し，行き交う人々に，京と伏見を繋ぎ多くの人々で賑わっていた往時の街道の活気を今もなお感じさせている。

エ　山陰街道

山陰街道は，京と山陰地方を結ぶ街道で，７世紀の駅制による行政区画「山陰道」に由来し，その主要道が平安京に接続されたものが原型となっており，古くから物流などを支える重要な陸路である。また，江戸時代に入ると山陰地方の諸大名の参勤交替の行き来が見られた。

樫原（かたぎはら）は，桂川西岸の山陰街道に沿う集落で，かつては山陰街道の宿場町であった。本陣が残り，今もなお街道沿いの家々が当時の面影を残している。建築形式としては町家に近いもので，近世中期くらいからこのような形式の農家住宅ができてきたと考えられる。

樫原の家々は街道よりも２～３m程奥まったところに建てられており，天井の低い２階を持つむしこ造で，大屋根の軒の出を深くして１階建のような外観となっている。街道と建物の空間は，物置，旅行者の休息場所として利用され，街道には障害物を置かないようにされ，幹線街道として支障のない開放空間にされていたと考えられ，まちなかの道とは異なる空間である。その中で，玉村家住宅（市指定有形文化財）は，市内で唯一残る本陣遺構であり，また樫原宿の近世町家として評価される。三ノ宮神社は，発祥は不明であるが，おそらく古代からあると推測される樫原地区の総鎮守で，明治時代に編纂された「京都府地誌」にも記載が見られる。境内には，地名の樫の古木があり，樫原の名称の由来とも言われている。５月の神幸祭は江戸中期には行われていた祭りで樫原祭と呼ばれ，延宝４年（１６７６）に成立した「日次紀事（ひなみきじ）」の中でも記されている。祭の日には神輿が担がれる。他にも，１月の元始祭をは

写真2-123　樫原の町並み

図2-71　山陰街道